

未来を生きる力を育む
試行錯誤と自立を支える大人であるために

校長 田中 一秀

北校舎のリフレッシュ工事が終わり、現在は校庭の仮設校舎の撤去が進められています。これが完了すれば、長きにわたり続いた工事がすべて終了となります。制限のある環境の中でも、子どもたちはそのことを言い訳にすることなく、日々の活動に意欲的に取り組んでいました。保護者・地域の皆様にも、多くのご不便をおかけしましたことと思います。ご理解とご協力に深く感謝申し上げます。

さて、古代中国の思想家・老子が言ったとされる言葉に「授人以魚 不如授人以漁」があります。「人に魚を与えれば一日で食べてしまいが、釣り方を教えれば一生食べていける」という教えて、「答えを与えるのではなく、学び方そのものを伝える重要性」を示す言葉として教育の場で広く知られています。

子どもたちの学校生活を見ていると、「大人が手を貸してしまえばすぐに済む」場面を多く目にします。確かにその日の問題はそれで解決しますが、そこで終わってしまうと「次はどうすればよいか」を自ら考える機会を奪ってしまうことにもつながります。

もちろん、子どもたちがすべてを自力で乗り越えられるわけではありません。支えるべきときには支え、寄り添うべきときには寄り添うことが大人の大切な役目です。しかし、そのうえで、私たちが大切にしたいのは、「子ども自身が考え、選び、行動できるよう導く」という視点です。「どうしてこうなったのか」「次はどう工夫するか」と一緒に考える時間こそ、子どもたちにとって最も価値のある学びとなります。

これから子どもたちが向き合う社会は、変化が速く、正解が一つに定まらない時代だと言われています。単に“釣り方”という既存の方法を教えても、その方法では魚が釣れなくなる時代が来るかもしれません。大切なのは、自ら学び続け、新しい方法を考え出す力と意欲をもつことです。魚にこだわらず、必要に応じてまったく別の方法を探し出すような柔軟さも求められます。

こうした力は一足飛びには身につきません。日々の生活の中で小さな挑戦を重ね、うまくいかない経験も積み、そのたびに「どう乗り越えるか」を自分で考えることで、少しずつ育っていきます。失敗したとき、「ダメだった」で終わるのか、「次はどうすればよいか」と問いかけるのか。その違いが、子どもたちの未来を左右する大切な経験になります。

ご家庭でも、お子さんが自分なりに考え、工夫しようとしている姿を温かく見守っていただければ幸いです。結果だけでなく、そこに至るまでの努力や過程に目を向け、励ましの言葉をかけていただくことが、子どもたちの大きな支えになります。

子どもたちの未来は、大人の関わりの一つ一つの積み重ねによって、より確かなものとなります。子どもたちがこれから向き合う社会に必要な力を育てるため、学校としても「問い続ける姿勢」「自ら選択する力」を育む教育活動をさらに充実させていきます。学校と家庭が同じ願いを共有し、子どもたちが自分の力で歩みを進められるよう、これからも共に応援していきたいと思えます。